

『子ども文書館だより ふみくら』について

藤沢市文書館 中村 修

藤沢市文書館(以下、文書館^{もんじょかん}と略称)では、文書館の仕事に親しみを持ってもらうため、一般の市民に向けた「文書館だより」として『文庫^{ふみくら}』(以下、『文庫』と略称)を刊行しているが、その子ども版として企画されたのが『子ども文書館だより ふみくら』(以下、『ふみくら』と略称)である。2009(平成21)年に創刊号を刊行して以来、これまでに第5号まで刊行してきたが、その経過で生じた課題等から編集や配布方法について再検討せざるをえない状況にある。そこで、公文書館等における子どもへの普及活動について考える上で何らかの参考になればと思い、発行方法やこれまで刊行してきたものの内容等について、紹介することにしたい。

『ふみくら』の発行部数は2,000部、中厚口の色上質紙に市役所庁内の印刷室でモノクロ印刷し、A4判4ページ建てとしたもので、図書館などの市内公共機関や公立小中学校および私立の学校、そして藤沢市周辺自治体の図書館や公文書館などに発送している。体裁や配布先については『文庫』と同じである。ただし、『ふみくら』は主な対象を「小学校6年生程度」と考えているので、市内小中学校55校により多くの部数を配布している。しかし、児童生徒全員に配布することは予算等の関係で不可能であるため、まずクラス担任の先生方に読んでもらい、その上で授業等において紹介をしていただけたらという考えであった(そのため、市内の公立小中学校への配布については、クラス数を把握したうえで配布している)。また、『文庫』の発行が年4回を目標としているのに対し、『ふみくら』の発行は年1回の予定である。

次に、これまで掲載した内容を紹介したい。まず創刊号(2009年3月刊行)では、巻頭で1931(昭和6)年頃に刊行された「江ノ島電鉄沿線名所図会」を取り上げた。現在の藤沢市域では主要な観光地として江の島があるが、戦前の観光リーフレットは藤沢および鎌倉とその周辺の主要な観光地が絵入りでわかりやすく紹介されている。そこで「名所図会^{めいしょ図会}」とはいかなるものかを説明し、それが約80年も前にカラーで印刷され、発行されたことを説明した。また、題名の表記について、写真では右から左に記されているが、これはミスではないことを伝え、他にも文書館に同じような資料があることも付け加えた。次に2ページ目では、「文書館(もんじょかん)って何ですか?」と題して、その役割を紹介しつつ、世界的に見ると日本では文書館制度に遅れがあることを示すために、各国の「国立の文書館に勤めている人の数」として、棒グラフで職員数が極端に少ない日本の現状をわかりやすくあらわした。そして3ページ目で「藤沢市文書館の仕事(第1回)」として、「①資料を見せて、問い合わせに答える」というレファレンス機能があることを示した。最後の4ページ目では、「写真に見る藤沢(第1回)」とし、1924(大正13)年と、1975(昭和50)年に写した藤沢駅をクイズ形式で取り上げた。また「みなさんへのおねがい」として、各家に古い資料があれば、文書館への連絡をお願いした。

第2号(2010年3月刊行)では、最初に1930(昭和5)年9月に出された仏教系幼稚園の園児募集チラシを取り上げた。このチラシでは、募集規定の中で「束修金(入園金の^{そくしゅうきん})

こと)はいりません」と書いている部分に注目した。この幼稚園では大正時代には束修金を徴収していたが、このころは世界恐慌の影響で景気が悪かったために、わざわざ「束修金不要」と明記しなければならなかったことを記した。2ページ目は「私たち文書館の仕事(第2回)」として、「市の歴史を本にする」と題し、市史編纂事業について紹介した。3ページ目では、「絵はがきが語る藤沢(第1回)」とし、明治30年代前半頃に出された「江ノ島全景」(原本は彩色のもの、写真1)を取り上げて解説を加えた。その中で、現在の様子とは大きく異なることを示すため、最近の写真も紹介した。そして、絵はがきでは河口付近に人々が集まっている様子がうかがえるが、それは地引網を引き終わって、取れた魚をみんなで分けているのではないかと思われることを記した。最後のページでは、前号のクイズの答えが藤沢駅であることを明記し、1980(昭和55)年に橋上駅舎として生まれ変わった藤沢駅の写真も掲載した。

第3号(2012年3月刊行)では、関東大震災によって全壊した藤沢駅の写真(地震発生当日の午後1時頃に撮影されたもの)を巻頭で掲載した。この写真を掲載したのは、前年の東日本大震災の発生を受けて、近代の藤沢を襲った大きな地震災害である、関東大震災について触れる必要があると考えたからである。説明文では、藤沢も関東大震災によって大きな揺れや津波に襲われたこと、東京や横浜のように大火災が発生することはなかったが、遊行寺などのお寺や、小学校の多くもつ

ぶれたことを紹介した。また、家の下敷きになるなどで、およそ160名の方が亡くなったことを記したうえで、市内の遠藤地区(現在、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスがある)のある集落では、谷川沿いにあったことで被害が出たために、集落ごと高台の土地に移転したことも説明した。

2ページ目では、「私たち文書館の仕事(第3回)」として、「資料を保存する」というテーマで紹介した。この中では、文書館がさまざまな記録(紙に書かれたものだけでなく、録音テープやCDも含まれる)を保存していること、和紙がとても丈夫な紙で世界中の文化財の修復にも使われているが、保管方法に注意しないと紙の害虫に食べられることや、湿気を含んで紙が固まり、開かなくなることなどを説明した。加えて、明治時代以後にもたらされた西洋の紙は、長い年月の間に酸性劣化が進行し、紙がゆっくりと焦げたように黒茶色になっていき、ついには粉のように細かく砕けてしまうことを記した。その原因が紙のにじみ止めのために加えられた酸性物質であり、それがまわりにある紙にまで移る現象(「酸の移行」)についても触れ、それを防ぐためにも中性紙や弱アルカリ性紙でできた封筒などに入れること、一枚になっている地図などであれば、透明なポリエステル・フィルムに挟んでしまう方法もあるということも紹介した。

3ページ目では、「ふじさわの今を伝える本」の第1回として、『グリーンハウス物語—戦禍に消えた名門ゴルフ場—』を取り上げた。この本はおよそ80年前に、小田急江ノ島線の善行駅などがある一帯に、ゴルフ場『藤澤カントリー倶楽部』(正式名称のため、あえて旧字体を使用する)があったことを紹介した本である。このゴルフ場には関東でも指折りの眺めと美しさを誇るコースがあり、大仏次郎などの著名人もプレーしていたが、戦争と敗戦後の混乱の中で閉鎖されてしまった。しかしその一方で、クラブハウスとして使われた建物は、今日までさまざまな形で使



写真1 江の島絵はがき

われ続け、現在も市内善行の県立体育センター内で「グリーンハウス」という名称で、食堂として地元の人々に親しまれている。紹介については、本の表紙および当時のプレール中の珍しい写真を掲載した。4ページ目では、「クイズ・写真に見る藤沢」の第2回として、1916（大正5）年に開設された、ある鉄道の駅の写真を取り上げた。掲載した写真には、駅のホームに蒸気機関車が入線する様子が写っている。

第4号（2013年3月発行）では、文書館に保存されている作家・芥川龍之介の肖像写真と、彼が11歳の時に発行していた回覧雑誌『日の出界』（写真2）を巻頭で取り上げた。これらは、市内鶴沼海岸に住んでいた、龍之介の甥にあたる文芸評論家の葛巻義敏（龍之介の姉・葛巻ヒサの長男）さんと、その妹である左登子^{さとう}さんによって保存されてきた資料群「葛巻文庫」の中にあつたものである。肖像写真は東京府立第三中学校（現・都立両国高等学校）の卒業記念で写されたものと思われる。また、回覧雑誌は龍之介が編集・発行していたもので、2ページ目では、回覧雑誌に掲載された龍之介の作品や龍之介が手直しを加えた他の児童の作品を掲載し、説明を加えた。3ページ目では、「むかしの人の手紙から（第1回）」として、北条早雲が江の島^{きんぜい}の人々の求めに応じて出したものとされる禁制を取り上げた。この史料は、早雲の花押が非常に大きく書かれているが、花押についても「大名が自分の名前を書く代わりに書いてい

たサインの一種」と説明した。そして4ページ目は前号の「クイズ・写真に見る藤沢（第2回）」の解答「辻堂駅」を説明し、現在駅の北口は「湘南シークロス」の名称で、大きなショッピングモールや病院などができたことも紹介した。

第5号（2014年7月発行）では、巻頭に六会青年学校の卒業記念写真帖に収められた、子供たちの農作業の風景を取り上げた。この写真帖は今からおよそ70年前に発行されたものであるが、その当時は農作業の機械化が進んでいなかったため、人の手に頼るところが少なくなかったと記した。次いで2ページと3ページ初の見開きで、日露戦争の風刺画を取り上げた（1ページ分の記事だけでは、風刺画の面白さを伝えるのは難しいと考えたからである）。これはロシアを毒蜘蛛に例え、それを鎧武者姿の日本が「金州南山（地名）」と書かれた足を日本刀で切り落とし、頭に矢を命中させるという構図になっているが、周辺の列強やアジア諸国の、この戦争に対しての考え方についても説明している。そして、4ページ目では「クイズ・写真で見ると藤沢」として小田急江ノ島線の本鶴沼駅を取り上げたが、解答を次号に先送りせず、1ページ完結で解答と解説を示すことにした。

以上が創刊号から第5号までの大まかな内容であるが、これらについては試行錯誤の連続であったという思いが強い。漢字にはルビを多く取り入れ、わかりやすい表現を考えたが、この内容で子どもたちが本当に読んでもくれるのだろうかという疑問がぬぐえなかったことは否めない。そのため、第4号からは、小学校で教員もされていた市史編さん委員にも、監修をお願いした。しかし、最初に述べたとおり文書館内では、根本的に編集等について再検討すべきだという声が高まっている。その理由の一つは発刊したものが読まれていると確信できるだけの反響がないことである。

文書館として、これまで子どもたちに向けての普及啓発事業に二の足を踏んでいた向き



写真2 芥川龍之介の「日の出海」

がある。しかし、小中学生の頃からさまざまな形で文書館とふれあう機会がなければ、大人になって文書館を理解し、利用してもらうことは難しいのではないかと思われる。そのためにもこの『ふみくら』が、一人でも多く

の子どもたちの目にとまり、学校で、そして家庭で自分たちの住む地域のことを考えるきっかけとなるよう、文書館として努力を続ける所存である。